

檀信徒各位

秋季彼岸法要のご案内

聖名 豪雨や台風、地震に見舞われた夏も終わりを告げ、
秋のお彼岸を迎えます。

皆々様にはご健勝の事とお慶び申し上げます。

秋季彼岸法要を下記のように勤めます。

ご多忙の処とは存じますが、お繰り合わせご参詣下さいます
ようご案内申し上げます。 合 掌

平成21年9月上浣

無量寺 住職 堤 俊翁 拝

記

※期 日 9月23日(水) 秋分の日

※時 間 午後1時より音楽法要・ご^{えこう}回向
午後2時より法話

※布教師 堤 俊翁 住職
講 題 「仏教的ターミナル・ケア」
臨終行儀について

※ご回向料

普通回向 1霊 1,000円 以上 ご志納下さい。

※お供え米、お供え米料 随意ご志納下さい。

本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

お彼岸の由来

ご存知ですか？

「暑さ寒さも彼岸まで」ということわざがあるように、厳しかった夏の暑さに別れを告げ、涼しさが感じられる秋彼岸の時節となりました。各寺院では法要を営み、人々は先祖の墓に詣で、家庭では、おはぎなどを作つて仏壇に供え、先祖の供養を行います。

「彼岸」とはこちら側の岸（現在私たちが生きている世界）に対する、向こう側の岸、つまり極楽浄土を意味します。行事としての「お彼岸」は、いうまでもなく春分と秋分の中日をはさんだ前後三日間の計一週間行われます。法然上人が浄土宗を開く上で師と仰いだ中国の善導大師が「中日には太陽が真西に沈むので、日没の彼方にある極楽浄土を想い、敬慕の心をもつべきである」と説いているように、太陽の沈む方角に向かって、極楽浄土に想いをいたし、今の自分を育んでくださった先祖に感謝し、極楽浄土に往生したいと決意を新たにするのが「お彼岸」なのです。

る極楽浄土を想い、敬慕

の心をもつべきである」と説いているように、太陽の沈む方角に向かって、極楽浄土に想いをいたし、今の自分を育んでくださった先祖に感謝し、極楽浄土に往生したいと決意を新たにするのが「お彼岸」なのです。実はあまり知られていませんが、この行事はインドや中国でも行われていない、日本独自のものです。

その起源は古く、「日本後記」や「源氏物語」などを読むと千年以上前から行われていたことがわかります。また、この一週間は、中日の前後三日間に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧という六波羅蜜の行を修め、日常の生活を反省し、仏道と信仰の実践週間としても意味づけられています。

釈尊の生涯 求道

太子はその日の夜半、愛馬カンタカにまたがり、馭者のチャンダカをともなつて城門を出て、深いねむりに静まり返つた街をとおり、村をすぎ、東の空が白むころアナヴァマー河をわたり、アヌプリヤーというところに辿り着き、ここで太子としての立派な服を脱ぎ、髪を切り、いとも粗末な、求道者の衣に着替えして、出家者となられた。別れを惜しむチャンダカに「お前は城に帰るがよい。恩愛の上は断ち切りがたいが、そうしなければ長い間悩み抜いた苦しみを解消することはできない。わたしは目的を達成するまでは、決して帰らない。わたしは固い決意をもって出家したと、父王に伝えて欲しい。」と伝言された。太子は二十九歳であつた。

チャンダカをカピラ城に帰した太子は、道を東南にとり、ガンジスの流れを渡り、ピンビサーラの統治するマガダ国の首都、ラージャグリハにたどりついた。ラージャグリハは当時の新しい文化の中心地で、そこにはバラモン教に満足できずに別の道を歩む求道者が多く住み、修行に励んでいた。太子はこの都を囲む丘の一つであるパーンダヴァの洞窟に居を求められた。

このことを伝え聞いたマガダ国のピンビサーラ王は、太子に出家を思いとどまれせようと努めたが、その決意は堅く、太子の心を動かすことはできなかつた。

駐車場案内

9月23日 彼岸法要の日の駐車場です。お寺の周囲の道路は、すべて駐車禁止です。監視員が頻りに廻ってきますので、ご注意ください。法要当日は南側の参拝者駐車場を利用できます。



仏教的ターミナル・ケア

臨終行儀というものは、一生に一度の重大事で、これ以上の大事はないと言ってもよいほどだ。臨終の善し悪しはこのありさまによって知られる。善い臨終は普段悪化していた病状も持ち直し、苦しむこともなく心も平安となり、合掌して眠るがごとく安らかな状態で、最期には南無阿弥陀仏と唱えて息を引き取るものである。

(念仏名義集) 聖光上人

阿弥陀二十五菩薩来迎図(知恩院蔵)



発願文(ほつがんもん)
善導大師

願わくは弟子等、命終の時に臨みて、心転倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心に諸々の苦痛なく、身心快樂なること禪定に入れるが如くして、聖衆鸚鵡現前し、仏の本願に乗じて、上品に阿弥陀仏国に往生せん。彼に到り已りて六神通を得、十方の界に入

りて苦の衆生を救済し、虚空法界を尽くさん。我が願も亦、是の如くならん。発願し已りて、心を至阿弥陀仏に帰命したてまつる。

現代語訳

私たちは心から次のようにありたいと願う。生命の終わる時に臨んで、心が転倒したり錯乱したり失念したりせず、また身体的にも精神的にも、さまざまな苦痛がなく、心身ともに楽しきこと、ちよほど禪定(心身ともに安定した状態)に入るようでありたいものである。

そして、多くの聖者方も、そのお姿をどうか現していただきたいものである。どうか(阿弥陀)仏のご本願のお力によって、阿弥陀仏の国(浄土)に最上の往生をさせていただきたい。

彼の国(浄土)に往生することができたならば、その往生したということによって六種の神通力を得て、自在に十方の世界に入りゆきて、苦しんでいる限りなき人々を救いたいと願う。私の願いはこのようでありたい。以上のことを発願して、ただひたすら阿弥陀仏に帰命したてまつる。

観音様建立一万巻写経

無量寺は筑後三十三カ所 観音霊場の 18 番札所です。

現在、境内納骨堂に仮安置されている、本尊聖観音様を山門横にお移します。

皆様の納経料をもって実現したいと思います。

- 1、日 時 平成 21 年 6 月より毎月第 3 土曜日但し、8 月はお休み

午後 3 時より勤行とお念仏（日常勤行式 浄土宗のお勤め）

終了後 写経会

※お勤めだけ、または写経会のみのご参加も歓迎します。

- 2、場 所 無量寺 1 階講堂にて

- 3、参加費 無 料

写経用紙（和紙）は準備しております。（実費をお願いします。）

用具は各自お好みのもの（筆、すずり、墨汁、サインペン等）を

ご持参ください。筆ペンを 20 本ほど準備しております。

納経を希望される方は納経料 1 巻 1,000 円をご志納下さい。

（納経料は積み立てて、観音様建立の資金といたします。）

かぞくておいしい!

かろな流 精進料理

秋野菜の麦味噌

朴葉包み焼き

浄土宗～かるな～より

<材料>

乾燥朴葉・・・4枚
 里芋・・・・・・8個
 ごぼう・・・・・・2本
 にんじん・・・・1/2本
 麦味噌・・・・・・100g
 みりん・・・・・・90cc
 砂糖・・・・・・50g

【 作 り 方 】



- 1 乾燥朴葉は、水をはったボールで戻しておく。
- 2 にんじんは皮をむいてもみじ型に抜く。皮をむいた里芋と軽く洗ったごぼうは3センチ程度に切って茹で、昆布出汁につけておく。
- 3 麦味噌にみりんと砂糖を加え、合わせ味噌を作る。
- 4 キッチンペーパーで水分をふき取った朴葉に(3)の合わせ味噌をのせ、(2)を包んでオーブンで焼く。